

従業員一人ひとりの健康を見守る 「家族的経営」を実現



創業110年超の老舗食品メーカー、
リボン食品が選んだメンタルヘルスケアの新たな形

1907年に日本で初めてマーガリンを製造したメーカーとして創業し、110年超の歴史を持つリボン食品株式会社。業務用マーガリンや冷凍パイ生地などを製造する同社は、「まごころをリボンに託して」という想いのもと、全国に高品質な商品を提供し続けてきました。

代表取締役社長の筏由加子氏が大切にしているのは「家族的経営」という考え方です。従業員一人ひとりが毎日元気に働けているか、ストレスを抱えていないか——そうした従業員の健康状態を経営者として常に気にかけてきました。筏社長は毎月1回、全工場を巡回して従業員と直接対話する時間を設けています。良いことも悪いことも率直に伝え合うことで、現場の声を経営に活かし、従業員の成長を支援する。そんな地道な取り組みを長年続けてきました。

2025年7月、同社は音声AI技術を活用したメンタルヘルスチェックシステム「Care Cube(ケアキューブ)」を導入。わずか3秒の声かけで心の健康状態を可視化できるこの新しいツールは、従業員約110名のうち大阪本社勤務90名を対象にテスト運用が開始されています。

「明日もこの場所に来たい」と思える職場づくり



篠社長が従業員の働く環境に特別な思いを持つきっかけとなったのが、2018年に実施した新社屋の建設でした。50年ぶりとなる建て替えには、大きな決断が必要でした。

「メーカーとしては、社屋よりも機械や工場設備に投資すべきだという意見もありました。先代とも議論を重ね、意見がすれ違うこともありましたが。しかし、機械を動かすのも人です。一日の中で最も長い時間を過ごす場所だからこそ、明日もその場所に行きたいと思えるような、綺麗で広く、居心地の良い社屋を作りたいと考えました」

従業員からは「こんな素敵な環境で働けて嬉しい」という声が多く寄せられ、採用活動でも大きな強みとなっています。さらに、他業種の企業からも見学の依頼が相次ぎ、常に社外の人々が訪れる活気ある職場となりました。



2018年に建て替えたリボン食品の本社新社屋

篠社長が従業員の働く環境に特別な思いを持つきっかけとなったのが、2018年に実施した新社屋の建設でした。50年ぶりとなる建て替えには、大きな決断が必要でした。

「社内に社外の方がいろいろな方が訪ねてくる会社なので、みんなキリッとするんですね。見られているという意識があって、綺麗にしていなくてはいけない気持ちになる。それが活力にもつながっていると感じています」と篠社長は語ります。

こうした物理的な環境整備に加えて、篠社長は従業員の心の健康状態を把握することの重要性を常々感じていました。社屋を建て替える際には、自身の執務室を最も奥に配置し、出社時に全員の顔を見ながら挨拶して部屋にたどり着くという動線を設計しました。これは、毎日従業員の顔色を見て健康状態を確認したいという思いからでした。

「家族的経営をしていますので、みんなが毎日元気かどうかは、社長として顔を見れば判断できるようになりたいとずっと思ってきました。ただ、それには限界があります。これまで通り、社員の様子を観察しつつも、別の視点からも従業員の健康を見守りたいと考えていました」



リボン食品 代表取締役社長 篠由加子氏

製造業特有の課題とシンプルなソリューションとの出会い

リボン食品が従業員の健康管理に特に注意を払う背景には、製造業ならではの課題がありました。

一つは業務上のトラブルや怪我のリスクです。機械を使った製造現場では、ゼロを目指していても事故が起こる可能性があります。「それがストレス度や、ちょっと他のことを考えていて注意が散漫になったことが原因だったりします。そうした事故を最小限にしたいという思いがありました」と篠社長は説明します。

もう一つは、製造業特有の業務環境です。接客業のようにさまざまな人と会う機会が少なく、単調でルーティンワークが中心となる製造現場では、従業員が成長の機会を感じにくいという課題がありました。

「接客業をされている方は、いろんな人と会ってストレス発散したり、成長の機会も多いと思います。でも製造業の中では、管理職が第三者の視点を持ちながら社員に伝えないと、成長の機会を見つけづらい環境です。常に社員を気にかけていると人一倍伝えていかないと、成長の機会が他業種と比べて少ないと感じていました」

そんな中、篠社長はCare Cubeと出会います。それまでDXには苦手意識を持っていたという篠社長でしたが、Care Cubeには大きな可能性を感じました。

「DX化は複雑で、導入するまでの理解のハードルの高さや、設定が難しさといったイメージから導入に踏み切れない状況がありました。しかし、サウンド&ヴィジョンテクノロジーズのデモを見て、すぐに理解できました。誰でも導入できるツールだと思ったところが決め手になりました」

特に魅力を感じたのは、そのシンプルさ。わずか3秒、声を発するだけで測定できるシステムであること。従業員にとって負担が少なく、毎日続けられる仕組みであることが重要でした。さらに、Care Cube自体が顔認証による勤怠管理機能を持っており、既存の勤怠管理システムともAPI連携やCSVでの連携が可能という点も魅力でした。

Care Cubeは、声帯の不随意反応を音声解析することで、本人も自覚していないストレス状態を客観的に数値化できる技術です。従来のアンケート方式では30～40分かかる測定が、わずか3秒で完了する。しかも声の高さや大きさ、会話の内容には左右されない。この手軽さと正確性の両立が、導入の決め手となりました。



従業員への丁寧な説明と信頼関係

2025年7月、リボン食品はCare Cubeを2台導入しました。1台は本社の従業員入口付近に、もう1台は4つの工場で働く従業員が利用する守衛室に設置。出退勤時に3秒間声をかけるだけで、その日のストレス状態を測定し、同時に顔認証による勤怠打刻も完了する仕組みです。

導入にあたって篠社長が最も注力したのは、従業員への丁寧な説明でした。

「家族的経営をしているので、『家族だからみんなが元気かどうか知りたい』『ストレスは悪いことじゃない、それを正しく知ることが大事なんだ』ということを伝えました。私がみんなのことを気にかけているということを理解してくれているので、大半の社員は導入に前向きに捉えていました」

一方で、プライバシーへの懸念を示す従業員もいました。「収集したデータをどう使うつもりなのか」という質問に対しては、担当者を通じて直接話をする機会を設け、プライベートに踏み込むためのものではないことを丁寧に説明しました。

「『そんなところまで知らなければならないのか』という声もありました。でも、逆手に取ってプライベートに踏み込もうとしているわけではないということは、わかってくれるはずだと思っていました。直接対話を重ねることで、最終的にはみんな『やってみようか』という雰囲気になりました」

Care Cubeで測定されたデータは、個人が特定できる形で管理者側に共有されます。このため、データの取り扱いについては細心の注意を払いました。あくまで従業員の健康管理とケアのためのものであり、人事評価などには一切使用しないという方針を明確にしたことが、従業員の理解と協力を得る上で重要でした。

運用開始後、従業員からはさまざまなフィードバックがありました。「自分のストレスがわかってよかった」という肯定的な意見がある一方、率直な改善要望も寄せられました。篠社長はこうした声にも真摯に耳を傾け、より良い運用方法を模索し続けています。

データに基づく組織的なケアの実現

テスト導入期間でも、Care Cubeは確実に成果を上げ始めています。最も印象的だったのは、決算期における経理部門のストレス値の変化でした。

「決算の前に、決算に携わっている人のストレス度がグループで目に見えて上昇しました。想定範囲内ではありましたが、データで可視化されたことで具体的なアクションにつなげやすくなりました。AIの正確性を改めて感じ、より効果的なマネジメントができるようになりました」

この事例は、Care Cubeが単なる健康管理ツールではなく、組織の状況を可視化するツールとしても機能することを示しています。繁忙期や特定の業務において従業員にかかる負荷を客観的に把握できることで、適切なタイミングでのサポートや業務調整が可能になりました。

ストレス値が異常値を示した従業員が見つかった際には、管理部から篠社長に報告が上がり、すぐに対応する仕組みができています。

「その上司に『彼(彼女)がこういう状態みたいだけど、何か思い当たることはあるか』『ちょっと気をつけて声かけしてあげてもらえるか』と、データを基に相談できるようになりました。これまでも声かけはしていましたが、今までは感覚的に『あの子が元気なさそうだから』というものでした。今回は数字として表れているものに対して対応するので、言われる側としても危機感を持って、すぐに解決したいという意識になった点は大きな変化ですね」

翌週、その従業員のストレス値が落ち着いていれば、「何か響いたのかな」と確認できる。このPDCAサイクルが回せるようになったことが、大きな変化だと篠社長は語ります。

現場のマネージャーにとっても、データに基づいた建設的なマネジメントができるようになりました。「各企業の中で数%の人がストレスを抱えているのは当たり前のことです。そういう人たちにいち早く気づくことは良いことだと管理職も認識しているので、全体として良い方向につながっています」

ストレスを正しく知ることの価値



リボン食品の製造ラインの様子

Care Cube導入を通じて、篠社長が従業員に最も伝えたかったメッセージがあります。それは「ストレスは悪いことじゃない」ということです。

導入前、多くの従業員は「ストレスがあること」自体をネガティブに捉えていました。しかし、Care Cubeの活用を通じて、適度なストレスは生産性や集中力を高める要素であり、重要なのはストレスの有無ではなく、それを正しく認識しコントロールすることだという理解が広がりました。

「ストレスを抱えるということ、それを正しく知ることがいかに大切か、これを従業員に伝えられたことが本当に良かったと思います。いろいろな事故や病気、人間関係のトラブルを防ぐことにつながります」

篠社長はさらにこう続けます。「ストレスを感じるとお酒を飲みながら、愚痴をこぼすというのが、ストレスとの向き合い方としてのわかりやすい例だと思います。当社の場合、ストレスチェックの目的をしっかりと伝えることを通じて、ストレスとの向き合い方を学び直す機会になったと思います。こうしたソリューションの導入は日本人へのストレス教育の一環にもつながると思います」

実際に、Care Cubeを継続的に使用することで、自分自身のストレスパターンを理解する従業員が増えています。「この時期は自分のストレスが高くなる傾向がある」「この業務の後には意識的にリフレッシュが必要だ」といった自己認識が深まることで、従業員自身が主体的に心の健康管理に取り組めるようになってきました。

最後に、同じように従業員のメンタルヘルス対策を検討している企業へ向けて、篠社長はこうアドバイスします。

「一番大切なのは、導入の目的をしっかりと伝えることです。単に『みんなの健康度を測るためだよ』だけではなく、もっと深い意味があることを経営者の思いとともに伝える。ストレスというものへの教育をした上で、何の目的でこれを導入するのかを説明することで、効果が上がると思います」

特に製造業においては、従業員の心身の健康が生産性や品質、そして安全に直結します。Care Cubeのようなツールは、目に見えにくい「心の健康」を可視化し、早期にケアすることを可能にします。しかし、ツールはあくまでも手段であり、最も重要なのは経営者が従業員一人ひとりを大切にする姿勢と、それを具体的な行動で示すことだと篠社長は強調します。

「一人ひとりの成長が会社の成長につながり、一人ひとりが幸せでないと会社は良い会社にならない。昨日より少しでも成長しているということが、幸せの根源だと考えています。そのためには健康でないといけない。体調が悪かったり元気でなかったら、効率の良い仕事は絶対できません」

製造業は日本の国力を支える重要な産業です。そこで働く人々の健康を守り、成長を支援することは、個々の企業の発展だけでなく、日本全体の成長にもつながる——そう語る筏社長の言葉には、創業110年超の老舗企業が大切にしてきた、人を中心に据えた経営哲学が凝縮されています。Care Cubeは、その想いを実現するための新たなツールとして、リボン食品の「家族的経営」を支え続けています。

会社概要

- 社名: リボン食品株式会社
- 代表者: 代表取締役社長 筏 由加子
- 創業: 1907年(明治40年)
- 本社所在地: 大阪府大阪市淀川区三津屋南3-15-28
- 従業員数: 約110名(Care Cube対象者90名)
- 事業内容: マーガリン、冷凍パイ生地、焼成タルト等の製造販売
- Care Cube導入時期: 2025年7月
- 導入台数: 2台(本社・工場守衛室)

株式会社サウンド & ヴィジョンテクノロジーズ
東京都港区南青山3-1-36青山丸竹ビル6階

Website : <https://sandvtechnologies.com/>
問合せ : info@sandvtechnologies.com